

ボルノー「希望の哲学」における 生の二重構造と「超越」

高 橋 浩

Ⅰ. 問題の所在

ボルノー (O. F. Bollnow) は、彼の「希望の哲学」(Die Philosophie der Hoffnung) の内容を展開した『新しい庇護性』(Neue Geborgenheit, 1955)¹⁾ において、次のようなルターの箴言を引用している。²⁾

明日世界が滅亡することを知ったとしても、
それでも、わたしは今日にもリンゴの苗木を植え、
わたしの罪をあがなうことを望むだろう。

ボルノーは、この箴言について次のように述べている。「人間は、自分の生を二重の可能性のもとで——あたかも明日尽きるかのように、またそれと同時に、生を自分の未来のために随意に処理することができるかのように——築きあげなければならない。」³⁾ まず彼が提示しているところの前者の可能性は、自己の現存在の全ての力を現在の瞬間に注ぎ込まねばならないという人間の生の実存的な生の側面との関連で述べられている。また後者の可能性は、人間は決して予見しえない未来の様々な可能性に対して自己を開き、いかなる危機に直面しようとも究極的には「すこやかな世界」(die heile Welt) の諸力を信頼せねばならないという人間の生の側面との関連で述べられている。

ボルノーは、人間の生にはこのような二重の局面が訪れることを提示しているのである。我々はまた、彼のこの言葉がボルノーの「希望の哲学」における生の二重構造を端的に表現していることを認識しうるのである。

本稿の目的は、このようなボルノーの「希望の哲学」において提示されている人間の生の二重性に着目し、彼が生をどのような構造をもつものとして

把握しているのかということを考察することである。

II. ボルノーにおける「生」と「実存」の二重構造

1. 「生」と「実存」

ボルノーは、前述したルターの箴言を踏まえて更に次のように説明を付け加えている。人間は生を、実存的な生の可能性とともに、他の可能性——「すなわち、生は、我々の生も、生一般も、先に進むという可能性」⁴⁾——の上に築かなければならない。前者が、人間の手中にのみある道徳的な領域にとどまっているのに対して、後者は、それを本質的に乗り越えて、有機的生長の領域すなわち自然の包括的な生起 (Geschen) に立ち入ってくる。このようにボルノーは指摘しているのである。

このボルノーの実存的側面の可能性と並らんだ他の生の可能性の主張の内容は、ディルタイの生の哲学における「生」(Leben) の概念を想起させる。すなわちボルノーは、『ディルタイ』(Dilthey, 1936)の中で、ディルタイの生の概念を次の三点に総括している。⁵⁾

- (1) 生は個々の人間の個別的な現存在ではなく、かつ同時により根源的に人々を結びつける、生の共通性を意味する。
- (2) 生は孤立した主観性ではなく、自己と世界を共通に包括する連関の全体性を意味する。
- (3) 生は無形態に持続する何かではなく、歴史的プロセスの中で自己を展開する生の秩序の全体を意味する。

これらの規定からも、ボルノーにおける実存的生の局面に対置されたもう一方の人間の生の局面とは、このようなディルタイの全体的、包括的な「生」の概念と密接に関連した、人間存在における「生」の展開の過程であると言えることができるのである。⁶⁾

2. 生の構造の図式

ところで、このような「生」と「実存」の両契機は、ボルノーの「希望の

哲学」においてどのような構造において関連づけられているのであろうか。この点について、更に考察を深めてゆくことにする。

ボルノーは、実存哲学の限界として次の点を挙げていた。「実存は、自己解離 (Sich-ablösen) の形式的な関連においてのみ規定される」⁷⁾ のであり、あらゆる事物・現象の固有の価値や意味は、実存哲学によっては皆必然的に失なわれてしまう。したがって、自然、文化、精神といったこうした領域が、実存哲学には欠けている。このようにボルノーは認識していた。

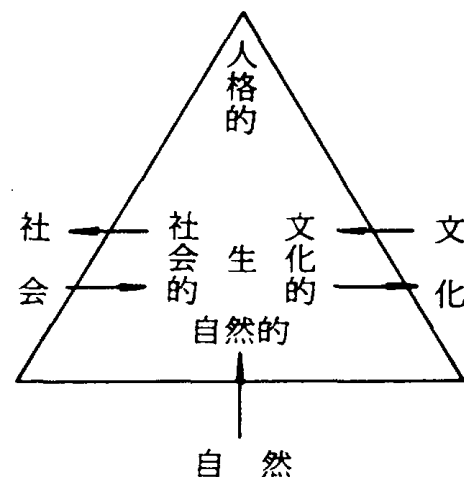
すなわちボルノーは、実存哲学においては、自然・文化の諸領域、歴史的恒常性、共同社会・社会的諸制度などといった人間の生に生起する諸連関が欠落していることを指摘しているのである。そして彼はこのような実存哲学の欠陥を、ディルタイの生の哲学の内容によって補完しようとした。彼は言う。「実存の哲学とならんでいまや更に他の、生と世界との哲学が発展せしめられねばならず、その生と世界との哲学によって実存の哲学では排除されていた内容面の充実の問題が扱われねばならない。」⁸⁾

そしてボルノーは、人間を実存の孤独から脱却せしめ、人間の生を再び意義深いものにするこのような自然・文化・精神などの諸実在を、人間を根底から「支えている実在」(eine tragende Realität) として把握している。⁹⁾

ところで森昭氏は、『教育の実践性と内面性』において、右の図のように人間存在の層構造を整理した。¹⁰⁾

すなわち、自然・文化・社会との交渉によって生ずる自然的・文化的・社会的な各層が、実存的覚醒によって生ずる人格的な層の根底にあるものとして、人間存在の基本構造を把握しているのである。

したがって、このような森氏の人間存在の基本構造についての理解と、ボルノーのそれとが、対応関係にあるよ



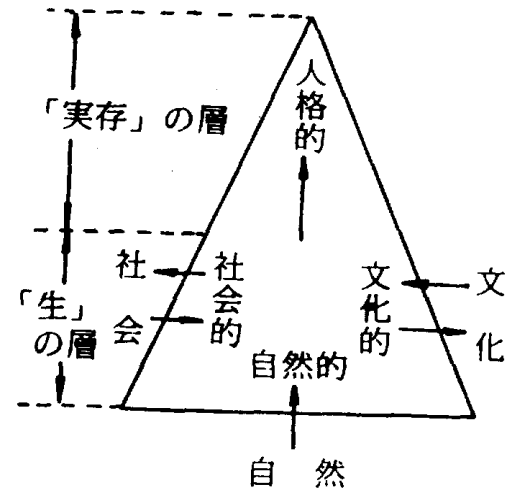
うに思われる。この点に着目して、森氏の図式を基礎に、ボルノーにおける生の構造を、右図のように整理することができる。¹¹⁾

しかしながら、ここで注意しなければならないことは、人間存在を支える自然・文化・社会などの実在を人間はいかなるかたちで獲得しうるかということである。

すでに筆者は『ICU教育研究23号』において、次のような事実を明らかにした。¹²⁾ すなわち、a). 人間を根底から支え、生を意義あるものにする全ての実在は、ヤコービによって正当にも「信」(Glaube)と呼ばれた仕方でのみ接近しうるとボルノーが認識していたこと、b). そしてこのような彼の主張は、「信」という行為によって人間の生のレベルを乗り越えて、究極的で絶対性をもった他者へと指向するものであり、「超越」(transzendenz)を指示するものである、ということである。

このような認識に従うならば、ルターの箴言を踏まえたボルノーの指摘も次のように理解しうる。彼が主張する“いかなる危機に直面しようとも究極的には「すこやかな世界」の諸力を信頼する”という課題も、このような「超越」のレベルに人間の心が開かれてこそ成し遂げうるのである。

したがってボルノーにおける「生」と「実存」との二重構造を検討する場合には、このような「超越」の問題を考慮せねばならないことになる。次節においては、先ほど設定した図式において、ボルノーの「超越」がどのように位置づけられるのかということについて説明することにする。



Ⅲ. ボルノーにおける「超越」

1. 「上への超越」と「下への超越」

ところで高坂正顕氏は、『私見 期待される人間像』において、実存哲学と生の哲学との「超越」について次のように指摘している。¹³⁾

高坂氏によれば、実存哲学は「上への超越」であるという。すなわち実存哲学は、無神論的実存主義ではなく、ほぼキルケゴールの実存哲学を指しているから、「神への信仰」と切りはなすことはできない。キルケゴールの哲学では、本来の自己すなわち実存は、神への超越、決断による飛躍を通じてのみ得られるということを考えてみれば、キルケゴールの実存主義はいわば「上への超越」を求めるものである。

これに対して生の哲学は、「下への超越」であるという。すなわち生の哲学は、バイタルな意味での生命を我々自身の生命の根底におき、いわば底に向かって超越するという点において、人間的生命の根底を確保しようとするのであり、人間はここでは「下への超越」（なおニーチェにおいては「上への超越」と「下への超越」が互いに結ばれ合っている）ともいえるべき方向において自己自身を取り戻そうとしている。

以上のような高坂氏の「上への超越」と「下への超越」という区分に従うならば、「生の哲学」と「実存哲学」との両哲学を基盤としたボルノーの「希望の哲学」における「超越」は、いかなる図式によって整理されるであろうか。

2. ボルノーにおける「上への超越」

まずボルノーの「希望の哲学」を「上への超越」との関連において検討してゆくことにする。

この問題について我々に大きな示唆を与えてくれるのは、『新しい庇護性』である。この論文によってボルノーは、実存主義との対決を通じて彼の新たな哲学の地平を切り開いていったのであるが、同論文でボルノーは「信」

(Glaube), 「希望」(Hoffnung), 「感謝」(Dank) などの徳の必要性を述べている。我々は、ボルノーのこれらについての論述を検討することによって、彼の「希望の哲学」が、宗教特にキリスト教とどのように関連しているかということを読み取ることができるのである。

a) 「信」

まずボルノーは、未来に対して敬虔な信頼を維持する内面的状態としての「安らいだ気持」(der getroste Mut) について論究している箇所です。次のように述べている。

確かに、あらゆる禍における究極的な庇護性に対する信頼としての「安らいだ気持」は、それ自身としては決して強奪できず、ただ恩寵のかたちで人間に授けられる、何らかの信仰(Gläubigkeit)を前提としている。「しかしながら、この信仰自体は特別に宗教的形式を、とりわけ、特別にキリスト教的な形式をとる必要はないのであって、それ以前に信仰の自然的形式があるのである。そしてこの形式は、キリスト教的な立場からは、超自然的信仰の自然的な“先行形式”(Vorform)と言われるであろう。」¹⁴⁾

そしてボルノーは、キリスト教的信仰を前提としていないこのような広い意味での信仰を「存在信仰」(Seinsgläubigkeit)と呼び、同時に同書の後の箇所ですべてこれを「信」(glaube)と再規定している。¹⁵⁾ 彼はこの「存在信仰」あるいは「信」が、哲学的な考察の圏内にあることを強調しているのである。

b) 「希望」

またボルノーの同じような主張は、「希望」の分析過程においても見いだすことができる。

彼は徳としての「希望」が、「人間に贈られなければならない何ものかとして、あるいは一つの恩恵または一種の恩寵……として、人間の関与にかかわりなく人間に訪れる」¹⁶⁾ ような特殊な種類の徳であることを指摘している。また更に彼は次のように述べている。ピーパー (J. Pieper) は、自然的希望と超自然的希望とを区別しているが、この区別に従うならば、前

者における希望は心の自然状態としては徳でもないであろうし、後者における希望も神学の枠組みのなかで述べることになる。したがって、希望という徳は、神学の事柄にすぎず、それ自体は哲学の権限範囲外にあるということになる。

しかし、ここで自然的として示された希望と、超自然的として示された希望との間には、「これまで両方の側からなおざりにされていた中間の領域があり、その領域のなかにここで主張された本来的な徳性をもった真の希望があるように思われるのである。」¹⁷⁾ すなわちボルノーは、希望にはキリスト教的希望の「自然的先行形式」(eine natürliche Vorform)があるのであって、希望は哲学の正当な対象であることを主張しているのである。

c) 「感謝」

「信」、「希望」と並んで、ボルノーが人間にとって必要な徳としてあげているのは、「感謝」であった。彼によれば、感謝の念は究極的、宗教的領域に接しており、生に対する一つの究極的関係のなかで完結するが、生はこの関係の実現を「自由にやってくるものとして」¹⁸⁾、「またそう呼びたいならば“恩寵”として受け取る」¹⁹⁾と言う。また更に彼は、感謝の念は特殊な宗教的諸形式に陥いる危険がないならば、「生または神に対する感謝の念という言葉を用いることができるであろう」²⁰⁾とも述べているのである。

このようなボルノーの主張は、「感謝」が宗教特にキリスト教と密接に関連してはいるものの、哲学の考察の圏内にあること、またそのような「感謝」が人間の生にとって意義深いものであることを示すものである。そしてこれは、「信」、「希望」の検討結果と一致するものと言えよう。

しかしここで特に注目すべきことは、「感謝」が、はっきりと定められた道徳的なものの領域を越えたところに恩寵のようなかたちで生じ、しかも「自由にやってくる」ことをボルノーが述べていることである。「信」及び「希望」について言及した箇所では、ボルノーは「神」という言葉を用いることはなかったが、ここでは特定の宗教における意味ではないことを限定してはいながらも、明確に「神」と言いきっている。したがって「感謝」

は、そのような「神」に対する感謝として、人間の意志を越えたところで恩寵のようなかたちで「自由に」人間に訪れるものとしての性格をもっていると言っているのである。

ところで、キリスト教における神の愛は、「自由」をその本質としているものであった。人間とは質的に区別され、絶対的で自己充足的な存在としての神があえて外に歩み出てゆくというような、自由な、人間に対する愛なのである。²¹⁾ したがってボルノーの「感謝」は、彼自身はキリスト教との特定な関連は否定していながらも、このような神の自由な愛に対する「感謝」としての性格を保持していると言っているであろう。

d) 「信」「希望」「感謝」とキリスト教の三元徳

ところでボルノーは、我々がこれまで検討してきた人間にとって不可欠な徳としての「信」、「希望」そして「感謝」の相互関係を、現在（→「信」）、未来（→「希望」）、過去（→「感謝」）という時間の関係に等しいことを指摘している。²²⁾

前述のように、ボルノーの「感謝」が、神の愛と極めて密接に関連していることを考慮するならば、我々は峰島旭雄氏とともに、次のように言うことができよう。すなわち、ボルノーの「信」「希望」「感謝」は、「キリスト教の信・望・愛の三倫理徳に対応するものである。」²³⁾

以上のようにボルノーの「希望の哲学」における主要な徳目は、キリスト教と極めて密接に関連している。彼が強調していることは、「信」「希望」「感謝」などが、キリスト教のみの領域における問題ではなく、哲学の考察の対象としての意義をもっているということである。すなわち、一般には神学あるいは宗教的信仰の圏内の問題と考えられている事柄を、ボルノーは彼独自の哲学的人間学の視点からそれ等のもつ人間の生にとっての意味を解明し、その意義を主張しているのである。このような意味で我々は、ボルノーの「希望の哲学」が、宗教的信仰とは区別された「哲学的信仰」²⁴⁾としての性格を保持していると言えよう。

いずれにしても、これまでの考察から明らかなように、ボルノーにとっ

て実存主義の克服という課題を考えてゆく過程において、「超越」は不可避の問題であったのである。しかも、キリスト教との結びつきは否定することはできず、ボルノーの「希望の哲学」は、高坂氏の言うところの「上への超越」を指し示していると言えよう。

3. ボルノーにおける「下への超越」

更に我々は、人間の実存的生の層を支える「生」の層における「超越」の問題を検討せねばならない。

既に我々は、ボルノーが実存哲学の欠陥をディルタイの生の哲学によって補完しようとしたことをみた。したがってここでは、ディルタイの生の哲学の内容を検討する必要があるのであるが、この課題の解明にとって重要なのが、ボルノーの著作『ディルタイ』である。

言うまでもなくディルタイの生の哲学における核心的な位置を占めている概念は、「生の連関」(der Lebensbezug)である。ボルノーはこの概念を検討するにあたって、生と世界との関係についてのディルタイの次のような言葉を引用しつつ、ディルタイの生の哲学の特徴を明らかにしていった。「すべての思考、すべての内的・外的行動は、それぞれ集約され、尖鋭化されてあらわれ、さらにそれを促進してゆくが、それ以外に私は静止状態をも体験する。それは夢、遊び、気散じ、注視、軽い活動—生の底層のようなものである。」

²⁵⁾ すなわち人間の生においては、二つの異なった状態、つまりはっきりと行為という集約へと促進されてゆく「緊張の状態」と、静止状態という軽い活動における「弛緩の状態」が存在する。そしてこの二つの側面は互いに対等ではなく、むしろ後者の方がより根源的なもので、「様々の能力を生み出す恒久的な底層」²⁶⁾ であり、人間はこの中でまだ特定の意志あるいは注意などの目標に縛られず、全体的な世界との未分離の統一の中に生きているのである。

このようにディルタイが、人間の生の内的連関が生じ、生の運動がはじめてその力強さを得るような「生の底層」(der Untergrund des Lebens) という概念を提示していることを、ボルノーは指摘している。ボルノーは、この

ような生の根源としての「生の底層」という概念を基礎として成立している
 デルタイの「生の連関」論を自己の哲学の中に取り入れていったのであつた。それはハイデッガーが、経験的な現実を、「存在的なもの」(das Ontische)と「存在論的なもの」(das Ontologische)との二の異なった地平に分割したことにボルノーは反対し、デルタイの側に立って「気分」(die Stimmung)の分析を行なったことによっても納得しうることである。²⁷⁾

いずれにしても、このようなデルタイ及びそれを受け入れたボルノーの「生の連関」論は、高坂氏が指摘するところの「バイタルな意味での生命を我々自身の生命の根底におき、いわば底に向かって超越するということにおいて、人間的生命の根底を確保しようとする」という「下への超越」を指し示していると言えよう。

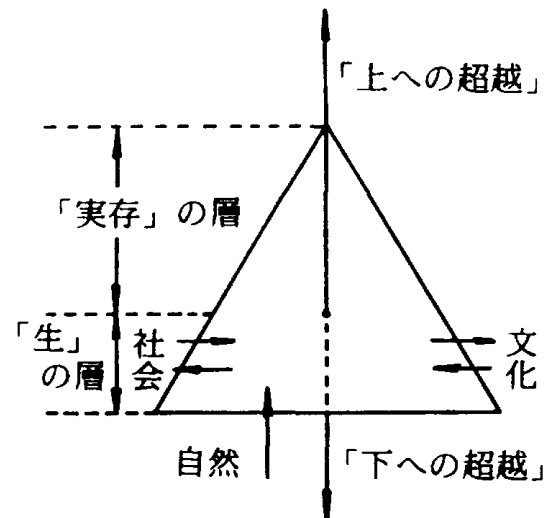
4. 「根源への復帰」と「新しい始まり」

以上のような検討の結果に従えば、「生の哲学」と「実存哲学」とを基盤として成立したボルノーの「希望の哲学」には、「上への超越」と「下への超越」という二つの「超越」が存在していることになる。しかし、ここで更に解明しなければならないことは、我々が既に明らかにしたボルノーの「希望の哲学」における生の二重構造の図式において、このような二つの「超越」はどのように位置づけられるのかということである。

いま仮に、右のように、さきほどの図式に生の層全体を貫ぬく「上」と「下」への超越をともに指し示す一本の軸を設定することにする。いうまでもなく、「下への超越」の方向は、「生」(Leben)の層において、人間の生が自己の根源へと立ち戻る方向であり、「上への超越」の方向は、人間の生に単独者としての「実存」の孤独が訪れながらも、生を根底から支える「生」の層を現出せしめる「信」、「希望」、「感謝」などを指し示す方向である。

このような「超越」を指し示す軸を設定することによって、ボルノーの「希望の哲学」の様々な概念に新たな光をあて、その理解をより深めてゆくことが可能になるのではないかと筆者は考える。そのような論究を本稿において

全面的に展開してゆくことはできないが、『危機と新しい始まり』(Krise und neuer Anfang, 1966)の中でボルノーが明らかにした、「根源への復帰」(die Rückführung zum Ursprung)と「新しい始まり」との概念を先ほど設定した図式を基礎に検討しておくことにする。



まずボルノーは、「人間の生は原則的に単なる“有機的”成長において発展

するのではなく、危機を通過することによって、はじめてその本来的存在を把握する」²⁸⁾ という実存哲学の認識から出発する。すなわち人間は“すでに何時も”頹廃の状態にあり、「埋められていた土台の上の土を取り払う」²⁹⁾ ようにして本質的根源へと復帰する必要性があることを、ボルノーは実存哲学に結びついて述べているのである。そして彼は、人間がくり返しこの本質的根源へと復帰し、再生し、若返りを成し遂げ、新たに始めねばならないことを提起しているのである。

ここでボルノーは、この「本質的根源への復帰」が、決して単純な実存哲学的解釈に満足すべきではなく、また「若返り」(die Erneuerung)における「内面的に若いということは、実存哲学の意味での本来的存在とは別のものである」³⁰⁾ ことを述べている。我々はすでに、ボルノーが、ハイデッガーの存在論における「存在的なもの」と「存在論的なもの」への分離に反対したことを見たが、「本質的根源への復帰」の問題においても、ボルノーはハイデッガーのこのような存在論における本来性と非本来性との対立の図式をしりぞけていると言えよう。そして、ボルノーがここで主張している「根源」とは、前述したようなディルタイの「生の底層」としての根源なのではないかと思われる。

先ほどの図式に従って述べれば、「実存」の層において体験されうる「危機」

が契機となって、固定化し硬直化した人間の生全体は、「下への超越」の方向へと回帰してゆき、「本質的根源」への復帰を成し遂げてゆくということになるのであろう。

そしてボルノーは更に「新しい始まり」の可能性について次のように述べている。すなわち「人間はどんな紛糾した状況にあっても新たに始めることができるという可能性をもって」³¹⁾おり、又どのような危機としての“失敗”に際しても、「新しい勇気」をもってやり直すことができることを述べているのである。ボルノーは、「本質的根源への復帰」から「新しい始まり」に至る人間の内面におけるプロセスについては、必ずしも明確には述べていないが、ここで次のような見解が成り立ちうるであろう。すなわち「本質的根源への復帰」によって、人間の生は、自己の本質に再び立ちかえって、新たな活力を得、その時点から始めることができるということである。

しかし筆者は、このような見解に対しては、疑問を感じざるをえない。すなわち、人間存在を根底から揺り動かすような危機の中に人間が陥り、未来への展望も、全ゆる支えも失った時点において、「新しい始まり」を可能にする「新しい勇気」は、このような生の「本質的根源」への復帰のみによっては生じえないのではないかと思われるのである。すなわち、すでに我々がボルノーの「上への超越」を指し示すものとして解明した、「信」「希望」及び「感謝」という特殊な徳の力によってこそ、このような「新しい始まり」が可能になるのではないだろうか。ボルノーは、この点について全く言及していないが、「上への超越」と「下への超越」とを指し示す軸によって貫ぬかれた我々の生の基本構造の図式に基づいて、このことが理解されうるのである。

IV. 総 括

以上のように、ボルノーの「希望の哲学」における「超越」の問題を、生の二重構造の図式の中で検討してきた。ボルノーにおける生の構造は、極めて複雑なものであることを我々は知ることができたのである。

これまでのボルノー研究においても、「生」と「実存」との生の二重構造に

関わる様々の議論がなされてきた。その内容についてここで全て検討することはできないが、次のような一点を指摘しうられる。すなわちボルノー人間学を的確、厳密に理解してゆくためには、彼の生の二重構造論において、切り開かれてくる「超越」の次元を見失ってはならないということである。特に筆者は、「上への超越」のレベルについてのボルノー人間学の展開に注意すべきであると思う。ボルノーの「信」、「希望」、「感謝」についての我々の検討からも明らかになったように、彼の哲学的人間学は、人間の生の「内在」のレベルにおける諸現象のみならず、「超越」のレベルにおける諸現象の分析に対しても開かれた方法論を含むものであったのである。ボルノーは宗教、特にキリスト教との関連において、哲学の論究の独自性を強調せんとしたがつために、究極的には、宗教的なものへと結びついてゆくものを意識的に避けていったと思われる。ボルノーの人間学の独自性もここに見いださう。

しかしながら、我々のボルノーにおける生の二重構造論の論理展開についての分析結果に従うならば、次のように言いうるのである。すなわち、ボルノーの「希望の哲学」においては、「生」の内在のレベルを超えた、人間存在を根底から支える究極的な実在としての超越的なものが設定されており、このような超越的なものによって、「生」と「実存」との両契機が包括され統一づけられていると言いうるのである。このように理解してこそ、彼の「希望の哲学」は、我々を人間存在に対する深い洞察へと導くものとなり、彼の人間学の諸内容が、生き生きとしたものとして我々に切迫してくることになるのではないだろうか。

註

- 1) Otto Friedrich Bollnow, *Neue Geborgenheit, Das Problem einer Überwindung des Existentialismus*, Stuttgart 1955, 3. Aufl. 1972. / 邦訳著、須田秀幸訳、『実存主義克服の諸問題——新しい庇護性』、未来社、1969年。
- 2) *ibid.* S. 67. / 上掲邦訳書, p. 72.

- 3) ibid. S. 69./同上書, p.75.
- 4) ibid. S. 68./同上書, p.74.
- 5) Bollnow, Ditley, Eine Einführung in seine Philosophie, Stuttgart 1955, S. 43-44./邦訳書, 麻生建訳, 『デイルタイーその哲学への案内』, 未来社, 1977年, p.92.
- 6) この事実は, ボルノーの次のような言葉からも確証しうる。デイルタイの歴史的生の哲学へは, ミッシュ(G. Misch), ノール(H. Nohl), シュプランガー(E. Spranger)によって導かれたが, 「内容的にみれば, ここで私は, 豊かに実るべき精神世界の偉大な内容に対する積極的な関係を発見したのであり……方法論的には, (精神諸科学に向けられる)解釈学的方法の基礎を発見したのである。」(ボルノー著, 藤縄干州訳, 『気分の本質』, 筑摩書房, 1976年, 日本語版へのまえがき)
- 7) Bollnow, Existenzphilosophie, Stuttgart, 1941, 4. Aufl. 1955. S.129/邦訳書, 塚越敏・金子正昭共訳, 『実存哲学概説』, 理想社, 昭和51年, p.228.
- 8) ibid. S.135./上掲邦訳書, p.237.
- 9) Bollnow, Neue Geborgenheit, S.23/上掲邦訳書, p.20.
- 10) 森昭著, 『森昭著作集 3 — 教育の実践性と内面性』, 泰明書房, 昭和53年, p.30.
- 11) 林忠幸氏は, 森氏のこの図式を参考にして, 人間存在の層構造についてのシュプランガー, ヘンツ(H. Henz), フリットナー(W. Flitner), ブレチンカ(W. Brezinka)などの諸見解を整理し, 図式化しているが, それはここで筆者が設定した図式とほぼ同様のものである。(林忠幸著, 「見失われた教育の次元 — 現代教育への人間学的アプローチ」, 『福岡教育大学紀要』, 第23号』昭和48年, p.15-25.)
- 12) 『国際基督教大学学報・1-A教育研究23』, 1980, p.89-108.
- 13) 高坂正顕著, 『私見 期待される人間像』, 筑摩書房, 1965, p.72-78.
- 14) Bollnow, Neue Geborgenheit, S.66-67./上掲邦訳書, p.71.
- 15) ibid. S.150-151/同邦訳書, pp.170-172.
- 16) ibid. S.126-127./同邦訳書, p.142.
- 17) ibid. S.128./同邦訳書, p.143. (傍点筆者)
- 18) ibid. S.141./同邦訳書, p.160. (傍点筆者)

- 19) ibid. S.141./同邦訳書, p.161.
- 20) ibid. S.142./同邦訳書, p.162. (傍点筆者)
- 21) 佐藤敏夫著、『キリスト教信仰概説』, 福音と現代社, 昭和53年, p.24-30. 参照。
- 22) Bollnow, Neue Geborgenheit, S.144./上掲邦訳書, p.164.
- 23) 峰島旭雄著、『宗教と哲学との間』, 北樹出版, 昭和54年, p.161. なお, キリスト教の三元徳については、『新約聖書』, 「コリント人への第一の手紙」, 第13章, 参照。
- 24) 「哲学的信仰」(der philosophische Glaube) という表現を明確に用いて自己の立場を表明したのはヤスパース (K. Jaspers) であったが, ここで筆者は, 宗教的信仰との対比において, より広い意味で「哲学的信仰」を考えている。なお峰島氏は前掲書において, 「哲学的信仰」の諸形態を検討する過程で, ヤスパース及びデューイ (J. Dewey) を取りあげ, 更に「信の確実性」との関連でマルセル (G. Marcel) とボルノーについても言及している。(『宗教と哲学との間』 pp.120-163. 参照)
- 25) Bollnow, Dilthey, S.56./上掲邦訳書, p.115.
- 26) ibid. S.57./同邦訳書, p.117.
- 27) Vgl. Bollnow, Das Wesen der Stimmungen, Frankfurt an Main 1956, 5. Aufl. 1974. S.24-29./上掲邦訳書, pp.13-17, 参照。
- 28) ボルノー著, 西村皓・鈴木謙三共訳, 『危機と新しい始まり』, 理想社, 昭和47年, p19.
- 29) 同上書, p.30.
- 30) 同上書, p.74.
- 31) 同上書, p.60.
- 32) この問題に関連する議論を展開している主要な論文は, 以下の如くである。
 大久保智著「オットー・フリードリッヒ・ボルノーにおける生 (Leben) の構造 — その倫理的考察 —」(『京大教育学部紀要第23号』1977年) / 西村皓著, 『生の教育学研究』, 世界書院, 1981年, / 林忠幸著, 「見失われた教育の次元 — 現代教育への人間学的アプローチ」(『福岡教育大学紀要, 第23号』1973年) / 境沢和男著, 「O. F. Bollnow における教育形式二元論の人間学的前提 — 教育学における実存の問題に関する一考察」(『山形大学紀要 — 教育科学 — 3 - 3』昭和38年)

The Double Structure of Human Life and “Transcendence” In Bollnow’s “Philosophy of Hope”

Hiroshi Takahashi

Through the examination of O. F. Bollnow’s writings, the following points are to be made clear in terms of the structure of human life.

1. Bollnow thinks that the human life has the double structure with two strata of “life” and “existence” in it. He places the former under the latter. In this way, he forms his “philosophy of hope” making up the insufficiency of existentialism with the philosophy of Dilthey.
2. Bollnow’s philosophy is deeply related to the problem of “transcendence”. There are two directions in his “transcendence”, that is, “transcendence above human life” and “transcendence below human life”. “Philosophy of hope” suggests that man can comprise and unify these two moments of “life” and “existence” by opening up his heart to these “transcendences”. The concept of “transcendence above human life” is very important to understand Bollnow’s anthropology.
3. Concept of “faith”, “hope” and “thankfulness” presented by Bollnow, are closely connected with christianity. Nevertheless, in order to insist on the originality of his “philosophy of hope”, he explained these concepts within the area of philosophy. This could be said to be the main characteristic of Bollnow’s anthropology. His philosophical anthropology leads us to a deep insight into human life.